# 広報おうら

平成22年1月号 No.520
毎月1日発行


From editors

## ひとりごと

▼新年明けましておめでとうございます。現在の広報おうらのスタイルになって6年。このスタイルもだいぶ定着してきましたので、平成22年度からはちょっとリニューアルでもしようかと思っています。読者のかたで、何かアドバイスなどがありましたら、ご一報ください。▼昨年は、ケガなどの多い年でした。毎月締め切りのあるこの仕事。編集に影響のあるケガなどは絶対にしないように気をつけたいと思います。▼寒くなると、ついついコタツが恋しくなるこの季節。布団にたどり着かなくて、時々コタツで寝てしまうことも…。でも、やっぱり布団に入ってゆっくり休まないと寝た気がしないですよね～。(藤)

## まちの風景

キャンドルナイト(高島小学校)

Photo 広報担当者

邑楽町携帯サイト

2次元コード対応の携帯電話は、右のコードをご利用ください。読み取りができない場合はURLをご入力ください。

携帯用URL
http://www.town.ora.gunma.jp/k


編集・発行
邑楽町役場企画課
〒370-0692（住所記入不要）
☎ 88-5511
FAX 89-0136
URL http://www.town.ora.gunma.jp
E-mail koho@town.ora.gunma.jp


あしもとに故郷 連載 第二百三十六回

# ふる里の歳時記 (109)

写真と文 厚川小一（エッセイスト）

## 年明くる

年明くる不動に睨(にら)まる過去は過去　厚川小一

また一つ過去を積むべく大旦(あした)　鈴木靖乃

私たちのような高齢者は、ふだんとあまり変わるところはないが、昨日まで何やかや気ぜわしかった年の瀬から一夜明けると、ゆったりしてくるのがこの元日の雰囲気である。私は今年も初日を拝みに多々良沼の弁天島には行けぬが、午前七時ちょっと前になると家を出る。古い年から新しい年に変わったことを俳句では「去年今年(こぞことし)」という季語を使っている。昭和二十五年の暮れ、新春の放送用に頼まれて作った高浜虚子の句――去年今年貫く棒の如(ごと)きもの――は有名である。鎌倉駅構内に掲げられていたこの句を見て、川端康成は随筆に取り上げた。虚子の代表作のひとつである。この句を頭に入れ初日を拝んでいると、背中はまだ去年のような気がしてくる。少しでも俳句を学んでいると、こんなつかまり場のある一刻が生まれる。

初日を拝んだ後は、初富士、初浅間、初赤城とぐるり手を合わせるのは私流であるが、古来多くの詩歌に詠われてきた初筑波は残念ながら、わが家からは見えない。新年で始まる俳句歳時記は四季四冊の外に新年が別冊となり五冊になっている。正月に関わる行事があまりにも多かった名残である。その内容をたぐってみると一番廃れてしまったのは、子どもの遊びである。屋外の遊びから室内に変わったが、それもまた少ない。ゲーム機の普及に押されぎみなのが、しばらく続いたままである。

快晴に親子絆(きずな)の凧(たこ)ひとつ　水戸水歩(すいほ)

「お正月には凧揚げて、こまを回して遊びましょう」戦前の子どもの遊びは、ほとんど外であった。――子どもは風の子――火の見やぐらに夕陽が落ちるまで野や山を駆け巡って遊びまくったものである。その中から男の子に最も人気のあった凧揚げの一部を保存記事から紹介してみようと引き出してみた。

「〝子どもは風の子〟とはよくいったものだ。名物の空っ風が吹き荒れる冬、特に十二月から正月にかけて頬(ほお)を真っ赤にした男の子が、てんでに手作りの凧を持って田んぼや畑のあぜ道にぞろぞろ集まってくる。お互いに、自慢の凧を見せびらかせてから、やがて一つ、二つとスルメ凧が空に舞い上がってゆく。そんな凧の中には、決まって一つぐらい〝ヒッポ〟(尾)のバランスが悪いのだろうか、くるくるっと宙返りの末、すとんと墜落してしまう凧があった。糸巻きいっぱいの糸をほぐされたスルメ凧は豆粒ほどに小さくなって冬空高く泳いで行く。かじかんだ両手に息を吹きつけながら、飽きもせず凧糸を操る影が、いくつも、いくつも、折からの夕陽を浴びて長く、長く、尾を引いていた。『あすへひとこと第三集』昔の遊びより」

スルメ凧というのは、形がスルメに似ているから、そう呼ばれるようになったといわれる。竹を割って削り出して骨を作るのもほとんど自作で、スルメ形に作れない子どもは角型に何とか手作りしていた。たとえ一枚の凧といえど、子どもたちの心身の成長のための促進剤であり、生活の知恵を習得する学習の場でもあったのである。「よく学び、よく遊べ」の時代に私たちは育ち、人間として生きるための「道」を伸ばした。今や外で遊べない車社会の一般化によって、未来の宝である大事な子どもたちの情操力を喪失させてしまったと、私は野に出る度そう感じている。子どもは風の子、風邪の子であってはならない。正月の空に凧が見られないのは、何とも寂しい限りである。